

一人一人のエピソード集

－20年間の実践を振り返る冊子作成を通して気付いたこと－

社会福祉法人せたがや櫛の木会 世田谷区立下馬福祉工房

長見 亮太

(実践を振りかえる)

1. はじめに

下馬福祉工房は知的障害のある35名ほどの方が通う就労継続B型施設で、焼き菓子作りや受注作業を行っている。開設当初から、年10回ほど開催される家族会の際に「私たちの実践」という文章を配布してきた。これは利用者一人一人について担当職員との関わりの中で印象的なエピソードを書き記したもので、その方の変化や育ち、新たな気づきを共有し合い、皆でその方を見守っているという思いを分かち合えるよう、長年続けてきた。

施設が20周年を迎えるにあたり、一人一人のエピソードを時系列でまとめ、一冊の冊子にしてご本人に渡すという取り組みを行った。



2. 方法

実践を記す際にはエピソード記述という方法を用いている。これは利用者の行動を単に客観的、記録的に記すのではなく、本人と支援者との間に生まれたエピソードを通して、支援者が「こんな風に感じた」という主観的な解釈を加えることで、行動面にのみ着目せず、行動の背景にある本人の心情を推察しようとする方法である。

知的障害のある方は伝えたいことが上手く言葉では伝えられなかったり、気持ちを伝えるための表現が個性的であるがゆえに、客観的事実だけでは解釈ができないことがある。その方の言動の背景にある心情を受け取る支援者の捉え方や受け止めが大事になってくる。それは同時に支援者の専門性や感性が問われることでもある。記述を重ねることは支援者にとって気付く力が磨かれる機会でもあるし、職員間で読み合うことで利用者への理解が深まったり、多面的に捉えることが出来る。また家族に読んでもらうことで「本人をこんな風に捉えている」という支援者側の思いを伝える機会にさせてもらっている。

3. 経過

冊子作成にあたり、過去の資料から一人一人の分を抜粋し、手作業で切り貼りしながら冊子にまとめていった。入職して数年の職員も多く、それぞれ担当する利用者について、過去のエピソードを読み返しながら冊子にまとめていく作業を経て、今の姿だけでは知れないその方の歴史に触れ、新鮮な驚きを感じたり、逆に今と変わらない姿を知り、ぶれない「その人らしさ」に気付かされたり、という発見があった。

